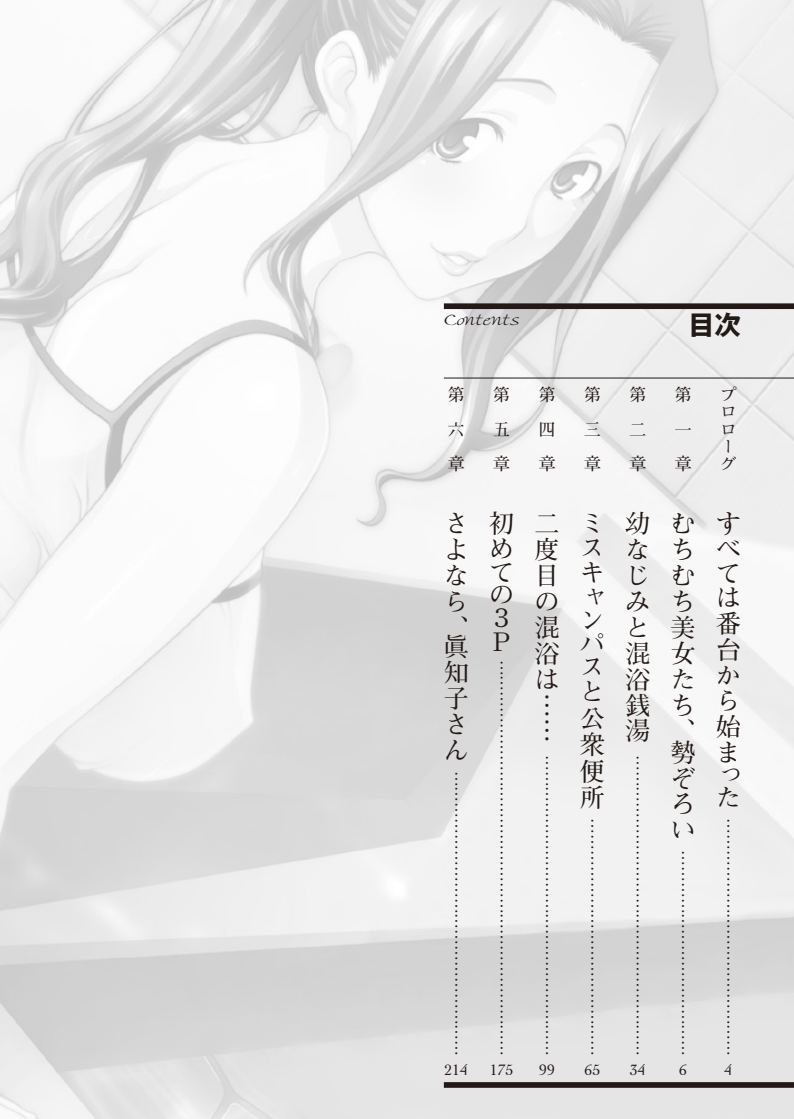
湯けむり下宿の艶尻お姉さんたち

庵乃音人
挿絵／翔丸

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



目次

Contents

プロローグ　すべては番台から始まった……4
第一章　むちむち美女たち、勢ぞろい……6
第二章　幼なじみと混浴銭湯……34
第三章　ミスキャンパスと公衆便所……65
第四章　二度目の混浴は……99
第五章　初めての3P……175
第六章　さよなら、眞知子さん……214

登場人物 *Characters*

北野修平
（きたの　しゅうへい）

二十歳の平凡な大学生。地方出身で進学に伴い上京し、今は眞知子の祖母の経営する銭湯の二階に間借りしている。

真田眞知子
（さなだ　まちこ）

東京郊外の老舗銭湯の跡取り娘で下宿を切り盛りしている。おしとやかながらもフェロモンむんむんの肉感的な肉体をしたお姉さん。

倉西明里
（くらにし　あかり）

主人公の大学の同級生で、良家令嬢。出自はおくびにも出さず、主人公に対して一途な愛を捧げる純な少女。

沖村菜々香
（おきむら　ななか）

修平の幼なじみ。どうしても彼と恋人関係になりたくて、彼の住む下宿に田舎からやってくる。

「見せて、お姉ちゃん。今日だけなんだもん、お姉ちゃんとこんなことできるの……」
一生に一度なのだと思うと、猛烈にわがままな気分になった。遠慮などしている場合ではない。変態だと思われたっていいと腹をくくりつつ、初めて目にする年上の美女のいやらしい部分にねちっこく視線を這わせる。
「あぁ、恥ずかしい……だめぇ……」
いやいやとかぶりを振り、眞知子は両手で顔を覆った。
手入れをしているのだろうか、陰毛は小判形のように綺麗に生え茂っていた。
体験人数のせいで手持ちのデータは限りなく少なかったけれど、年相応に完熟した性器に思える。肉ラビアは比較的小さく、初々しささえ感じさせる眺めを呈していた。
（ビラビラ、すごく綺麗なローズピンクだ。それに、膣粘膜も……）
ふっくらといやらしく盛りあがる大陰唇は、くすんだアーモンドのような色をしていた。クリトリスだって、もうそれなりに勃起しているはずだが、いまだに肉鞘のなかに恥ずかしそうに肉実を潜めている。
「お姉ちゃん……僕、今お姉ちゃんをがに股にしてオマ〇コ見てるんだね……」
痺れるような高揚感に身も心も妖しくざわめくのを感じながら、わざと眞知子を困らせたくなってそう言った。

「い、いやッ……！　そんな恥ずかしいこと言わないで……」
「今度はお尻の穴も見たい……」
「あっ……」
うろたえる眞知子の手を取って立たせると、独楽のように身体を反転させる。
「ちょ……やっ、修平、やだ。やめて……きゃっ……」
湯船の縁に手を置き、尻を突き出させた。大迫力で迫る大きなお尻の量感は、公園の公衆便所で目にした明里の巨尻といい勝負だった。
二つの尻肉を鷲掴みにし、肉まんでも割るように左右に広げる。尻の谷間が露わになった。思わず息を飲み、うっとりと見とれる。露わになった肛門は乳輪と同じ淡い桜色をしていた。いやらしい肉の窄まりの右斜め下に、小さなほくろがある。
「信じられない……ねえ、お尻の穴、すごく綺麗なピンク色だって知ってた？」
感激し、思わず聞いてしまう。言葉責めなどするつもりはなかったが、結果的にそうなった。「やだ……恥ずかしいこと言わないで……」という羞恥にまみれた色っぽい声が、「へ」の字に曲がった柔らかな女体から溢れた。
「舐めちゃうもんね」
悪戯小僧のように宣戦布告をし、舌を突き出した。

尻の谷間に顔を埋め、薄桃色をした魅惑的な肉穴にピチャッと舌を這わせる。
「ひゃう！　あ、こら……だめ、舐めないで。そんなとこ舐めちゃ……ふわぁ……」
大きなお尻がひくんと跳ねた。思わぬ気持ちよさについ跳ね躍った感じだ。
そんな眞知子の淫らな反応に、つい恥悦を炙られる。
「お姉ちゃん、ちゅぱ……」
「ふわあぁ……」
暴れる巨尻を両手で押さえつけ、いっそう熱烈な舌使いで肛肉をほじった。
放射状に伸びる肉皺の感触が舌に心地いい。
「あん、だめ。だめだめ。やだ、許して……んはあぁ……」
悩乱した大きな尻が艶めかしくくねり、派手に暴れる。湯船のなかで、お湯の飛沫が勢いよく跳ねた。
（眞知子さん、すごいいやらしい声。こんなエッチな声を出す人だったんだ……）
淑やかで慎みに満ちた日ごろの姿とのギャップに、我知らず興奮を煽られる。
ふと見ると、卑猥に開花した牝の恥裂も、舌で責めたわけでもないのにいつの間にかお湯とは異質のヌルヌルした汁を溢れ出させていた。
「お姉ちゃん、僕もうたまらないよ……」

湯船のなかに立ち上がった。逞しく反りかえった肉棒を手に取り、まん丸と大きなお尻に擦りつける。

熱く火照った尻肉の温かさと柔らかさが亀頭に心地いい。

「はうっ、修平。だめ、そんなエッチなことしちゃ、あぁ……」

下品なふるまいに恥悦を煽られるのか。かぶりを振っていやがり、巨尻を艶めかしくくねらせて抗いつつも、その声には淫らな欲情の色が滲んだ。

重力に負けてダラリと垂れた牛のようなおっぱいが、肉を波打たせてあっちへこっちへと揺れ躍る眺めも最高にいやらしい。

「うう、お姉ちゃん……」

何度も尻肉を擦りあげてから、責めの矛先をふとももに変えた。

健康的に白い肉を震わせるふとももの弾力は尻肉以上だ。興奮して亀頭を擦りつけるたびに、たっぷりの脂肪とともに肉が波打ち、いやらしく鈴口がめり込む。

「やっ、だめ、修平……あっ、あん、いやっ、ふはうぅ……」

「あぁ、お姉ちゃん、こんなことしても怒らないでね」

修平は「あらかじめ懇願してから行為に出る」という反則技に出た。

淫らな恥悦に煽られ、どうしてもしてみたくなったのは——尻ずりだ。

尻の谷間にペニスを挟み、鷲掴みにした尻肉を中央に寄せてギュッと挟みこむ。
「あっ……や、やだ、そんな……恥ずかしい……フワッ、アアン……」
前後に腰をくねらせ、ピストンを始めた。窮屈に圧迫した尻肉の谷間を、肉棒が行ったり来たりする。谷間の肉とカリ首が擦れあい、しぶくような快感が火を吹いた。
（あぁ、また我慢汁が出ちゃった……）
亀頭の先から先走り汁が漏れ、アナルを穢した。修平は亀頭を使い、薄桃色の肛肉にカウパーを練り込む。放射状の皺々と肉傘が擦過し、強烈な酸味が身体を焼いた。
「やん、修平、あはぁ、だめ……あっあっあっ……恥ずかしい……あはぁ……」
「はぁはぁ……お姉ちゃん……もう我慢できない……」
獰猛な生殖本能が発情した身体を支配した。
湯船の縁に手を置いて背後に尻を突き出す美女に、さらに足を開かせる。
「入れるよ……いいんだよね、入れても……」
「修平……」位置を整え、いやらしく開花した肉壺に亀頭を密着させようとすると、艶めかしい声で眞知子が言った。「初めてなの」
「えっ」思わず息を飲む。
（ま、眞知子さん……処女だったの!?）

「年上なのに恥ずかしい。お姉さんらしくしたいのに、初めてなの……」
窮屈な体勢で振り向く可憐な美貌が、いっそう凄艶な朱色に染まっていた。
「もし痛がってもがっかりしないでね。遠慮してやめなくてもいいからね」
「お姉ちゃん……」
思わぬ事実を聞かされ、修平は戸惑いと感激の双方に悩乱する。
（てっきり、それなりの経験があるんだと思ってた。だからさっきのフェラも、何となくぎこちなく感じられたんだな。眞知子さん、僕のために一生懸命に……）
あまりの幸せに、今にも腰を突き出して、処女を奪ってみたいという衝動を覚えた。
だが本当にそんなことをしていいのか。自分なんかに、そんな権利があるのか。
（ううっ……）
こんなときに思い出すのは悔しかったけれど、脳裏を松永の面影がよぎった。
自分とは今日一回限りの関係だと宣言されてしまっていた。つまり、もしも松永のもとに嫁ぐようなことがあれば、自分は彼女を傷物にして送り出すことになる。
（そんなこと、できない）
眞知子の処女を奪うなんて、あまりに身勝手すぎる欲望である気がした。
今は激情に身を委ね、捧げてもいいと彼女も思ってくれているのかも知れないけれ

ど、もしかしたら後で後悔することになるかも知れない。
（で、でも……一つになりたい！　うー、もう我慢できないよ……）
理性と肉欲の狭間で、青年は激しく葛藤した。
そんな彼の目に、尻の谷間で恥ずかしそうにひくつく薄桃色の肛肉が止まる。
（ううっ、こ、肛門……眞知子さんの……お姉ちゃんの肛門……）
「えっ。ひぃ。修平、何をするの」
気づいたときには、牝穴のとば口からアナルへと亀頭が移っていた。挿入しやすいように大きなお尻を押さえつけ、全裸の処女美人に大胆に股を開かせる。
「修平、違うわ。そこじゃない」
「お姉ちゃん、僕、処女なんてもらえない。お姉ちゃんが可哀想すぎる」
だから肛門を犯していいのかという自責の念はもちろんあった。
だが育ち盛りの肉体には、大好きな人のもっとも大切な部分をあきらめるだけでも地獄のようなつらさ。せめてアナルをという焦げつく欲望に抗しきれない。
「修平、嘘でしょ、いや……」
「ごめんね、お姉ちゃん。僕ひどいことしちゃう……」
うわずった声で謝罪し、腰を突き出そうとした。だが立ちバックで挿入しようとす

るには、どうにもアナルの位置がペニスと合わない。
階段のようになっているスペースにあがり、改めて腰を落とした。
ようやくスムーズに、菊蕾に挿入できそうな体勢になる。改めてペニスに手をやり、角度を変えて亀頭を肛門に押しつけた。
「ひぃ！　やだ、修平……やだやだ。そこはだめ。きゃあぁ……」
腰を押し出すと、強烈な圧迫感が押し返してくる。前につんのめるようにさせられた女体から「やめて……」とまたも悲痛な悲鳴が漏れた。
「力抜いて、お姉ちゃん。お願い」引きつった声をあげる眞知子に哀願するように言った。「入れたいけど、オマ〇コは我慢する。だから、どうかお尻の穴を……」
「うーうー……うーうーうー……」
困惑した呻き声が、開店を間近に控えた桃の湯の風呂場に響いた。
どれぐらい待っただろう。やがて、緊張してこわばる女体から、ゆっくりと力が抜けた。窄まっていた肛肉も、おもむろに淫らな皺を広げる。
「お姉ちゃん……」
もう一度腰を突き出した。しつこく舐め続けたせいで、肛門はたっぷりの唾液にまみれている。それが潤滑油になった。亀頭が変形しながら、窮屈極まりない肉穴のな

かに飛びこむ。悲痛な叫びをあげ、男根を受け入れた女体が背筋を仰け反らせた。
「い、痛い……」
「ごめんね、お姉ちゃん。ごめんね……」
どっちみち、痛がらせてしまうことに変わりはないのだ。
だがそう気づいても、もう遅かった。極限まで肥大した亀頭が狭い肛門をミチミチと全方向に押し広げ、温かなお尻のなかに入っていく。排泄粘膜の卑猥なぬめりが肉傘と擦れあい、とろけるような気持ちよさがしぶいた。
「あぁ、キツい……」
驚いたのは肛肉の強烈な締めつけだ。サイズ違いの小さな輪ゴムを無理やり陰茎にはめられるのにも似た激感が、挿入の進度につれ、亀頭から根元に移動していく。
猛る勃起のすべてを肛門に埋めると、思わず歓喜の呻きが漏れた。ぬめぬめした禁忌な肉たちがペニスを締めつけ、気を抜けばすぐにでも射精してしまいそうだ。
しかしそんな恍惚とするような快感は、痛みをこらえた眞知子の献身があってこそのものなのだと、修平は複雑な気分になる。
「う、動いていい、お姉ちゃん……？」気遣う口調で、おそるおそる聞いた。
「うくうぅ……い、いいわよ……いっぱい……いっぱい気持ちよくなって……」

上から自分が覆いかぶさっているせいで、移動途中の尺取り虫みたいにお尻を突き出す卑猥な格好になっていた。

けれど眞知子はどこまでも優しく、献身的だった。背筋をしなやかに仰け反らせたまま、優しい声で彼を許す。痛い思いをさせるのは本望ではなかった。

そろそろと腰を動かし、窮屈極まりない肛門のなかで肉棒の抜き差しを開始する。

「あうっ、あっ……ふはぁ……」

肛門に勃起ペニスを受け入れた全裸の美女から、エロチックな声が漏れた。

本当は痛いのかも知れないけれど、もうそうは言わない。

「お姉ちゃん、平気……？」

「気持ちよくなって、修平。お姉ちゃんのお尻で。あん、修平……ふはぁ……」

眞知子の喉から漏れ出る艶やかな声に、思わず背筋がゾクリとした。

女の人がエッチのときにあげる声は、どうしてこんなにも官能的なのだろう。

明里のときにも菜々香のときにも思ったが、今犯している美しいこの人も、ふだんの佇まいが清楚で淑やかな分、いやらしく漏れ出す声とのギャップが猛烈に猥褻だ。

「うぅ、気持ちいい。お姉ちゃんの肛門がチンポを締めつけて……うわぁ……」

思わず天を仰いだ。多分首筋が引きつっているはずだった。

ペニスの抜き差しをするたびに、小さな輪ゴムのような締めつけが根元から亀頭へ、亀頭から根元へと慌ただしく移動し、一気に射精感が募ってくる。
「あはぁ、修平、恥ずかしい……あうっ、ふわっ、あぁぁ……」
もしかしたら、少しずつ痛みより快感の方がまさり始めたのか。眞知子は窮屈な体位で犯されながら、鼓膜を妖しく酔わせる悩ましげな声をあげ始めた。
淫らにくねる背筋に、汗の粒がさらに滲み出した。完全に身体を密着させ、重力に負けてダイナミックに揺れていた乳房を鷲掴みにし、搾乳じみた手つきで揉む。
「やん、修平、あっあっ、だめ、やうっ、ふはぁ……」
「少しよくなってきた？　痛くないよね？　もっと激しくしていいよね？」
汗とお湯でぬるぬるになった乳房を揉みしだき、先っぽの勃起乳首を指で擦り倒しながら、うわずった声で聞いた。
「あうっ、ふはぁ……いいのよ、もっと動いて。お姉ちゃんも少しだけ……はぁ……」
（感じて来たんだ。あぁ、何ていやらしい声……）
痛いのではないのだと分かり、淫らな高揚感が増した。
汗まみれの首筋に口づける。火照った女体がビクッと痙攣した。
「はふぅ、だめっ、やん、修平、だめ、あふう、あふうぅ……」

いつの間にか明里も読んでいた何かを元に戻し、ベッドにあがってきた。卑猥な行為を見せつけられ、菜々香と二人で自慰に耽ってしまったことを恥じているらしい。
「そんなこと言われても……」
「あ、また勃ってきたわ」
何だか人が変わったようだった。修平が勃起したことにめざとく気づいた大学一の美少女は、ベルトをガチャつかせてブリーフごとジーンズを脱がせようとする。
「ちょっと、明里ちゃん⁉」思わずうわずった声をあげ、抗おうとした。だがそんな行為が、よけいサディスティックな興奮を煽ってしまうらしい。
「そうだよ。あたしたち、このままじゃ収まらない……」
菜々香も負けていなかった。幼なじみの上半身から長袖のＴシャツを脱がせると、何を思い立ったか突然ベッドから下り、チェストに近づく。
「わあ、下着、すごいいっぱい。どれも可愛いなぁ」
引き出しを開けて嘆声をあげた。丁寧に畳んで並べられた色とりどりの下着が無数にある。一つを手に取り、再び戻ってきた、折しも明里の手で下半身を丸出しにされ、全裸にされたばかりの修平の顔に、広げたショーツが思いきり押しつけられた。
「ぷはぁ……」

「枕よりパンツの方がもっといいでしょ、修平ちゃん？　あー、妬けちゃうなぁ」
「うん、悔しい。嫉妬しちゃう。すごくしちゃう」
駄々っ子みたいに地団駄しつつパンツを押しつける菜々香に、明里も同調する。仰向けにされてもがく全裸の身体を押さえつけながら、何やらモゾモゾとやっていた。
思いきり押しつけられるショーツの隙間から見た。明里は膝立ちの体勢になり、内股になってパンツを脱いでいる。張りだした臀部から桃の皮でも剥くようにつるんと脱いだのは、フリルがついた白いレースのパンティだ。
「私のも嗅いでほしい。眞知子さんのばっかりじゃなくて……」
信じられなかった。本当に、いつもの彼女ではない。
脱いだばかりのまだ温かいショーツを、熱烈な仕草で顔に押しつけてくる。
「むはぁ、あ、明里ちゃん……」
愕然とした。眞知子のショーツは洗濯後のものだったため清潔な布の香りしかしなかったが、明里のは違う。たった今まで股間にぴったりと密着し、分泌された汗だのおしっこの残滓だの何だのをたっぷりと染みこませた「汚れ物」だ。
（あぁ、嘘だろう。明里ちゃんのアソコの匂いが濃密に香って……んあぁ……）
「あー、明里さんずるいぃ。あたしだってパンツぅ……」

二人は共通の敵にジェラシーの炎を燃やす仲間でありながら、同時に今なおライバル同士でもあった。菜々香は昔から、負けん気の強い女の子だった。自分もショーツを脱ぎ、競いあうように修平の顔面に生温かな下着の布を食いこませる。

「や、やめろ、菜々香。そんなことしちゃ、ぷはぁ……」

抗う声が思わずうわずった。これまた女の子のいやらしい分泌物が潤沢に染みついた蠱惑的な責め具。看護学校の学生というのはよく動くことが多いのか、それとも明里よりも基本的に体臭が強い娘なのか。

汚れたクロッチから香る汗やケダモノじみた生臭い匂いは、菜々香のパンツの方が強かった。一方、上品な身のこなしを身上とし、ふるまいの優雅さという意味では明らかにまさっているのに、アンモニアの残り香は明里の方が強い。

（うくぅ、どっちのパンツもいやらしい匂いをプンプンさせて。感じちゃう……）

狼狽しながらも、あまりに卑猥すぎる二人の責めに、身も心も妖しく痺れた。

眞知子との真の関係については、すでにほとんど告白していた。

菜々香への遠慮から、たった一回だけの行為だからねとしっかり釘を刺されていたこと。にもかかわらず、さっきあんな風に眞知子を困らせたのは、明らかにルール違反だったこと。つまり悪いのは眞知子ではなく、あくまでもこの自分だと。

犯したのが秘部ではなくアナルだということも、とうとう白状させられた。
だが正直に告白しても――いや、すればするほど、明里と菜々香の嫉妬は高まった。自分たちも愛されているとは分かっていても、やはり眞知子にはかなわないと思ってしまったのか。
『そんなに好きなら、眞知子さんの部屋を一度は覗いてみたいでしょ』
そんな菜々香の悪戯っぽい言葉から、すべては始まった。
あれよあれよという間に二人のペースに巻きこまれ、気がつけば、愛しい女性のベッドの上で、こうしてパンツを押しつけられている。
「やだ、修平ちゃんたら変態。あたしたちのパンツのせいでちんちんこんなに……」
「まあ、ほんと。いやらしい……」
なおも汚れた下着を顔に押しつけながら、二人は侮蔑とも興奮ともつかない声をあげた。話題の的の肉棒が狂おしいほど硬くなり、亀頭を極限まで膨らませて小刻みに痙攣していることは、見なくても分かった。
「あはぁ、こんなに勃起して。修平くん、私、興奮しちゃう……」
震える声で言うと、明里は自分のショーツを修平の頭からすっぽり被せた。せわしない手つきで着ているものを順番に脱ぎ、全裸になっていく。

「あたしも……たまんなくなってきちゃったぁ……」
取り乱した声が、菜々香の喉からもあがった。小さくパンツを丸めると、あろうことか修平の口のなかに突っこみ、明里と一緒に全裸になっていく。
「むはぁ、あ、明里ひゃん、菜々香……おぉ……」
あっという間に、全員がすっぽんぽんになった。どうしてこんなことになってしまったのか。積極果敢なタイプの菜々香はともかく、明里までもが完全に痴女のようになり、ジェラシーと肉悦を露わにして火照った女体で挑みかかってくる。
「さっき射精したばかりなのに、こんなに勃起して……」
そう言うと、明里は修平に背中を向け、股間にまたがった。
挿入されるのかと思ったらそうではない。彼の身体の両脇に手を突き、女の子座りのような体勢になって、股間をペニスに擦りつけてくる。
「あ、明里ひゃん……うわあぁ……」
お腹にくっつきそうになっていた肉棒に陰部を押しつけられ、痺れるような快感が湧いた。熱くとろけた牝肉が、卑猥なぬめり汁をサオの部分に塗りたくってくる。
「あぁ、いやらしい。あたしも一緒にしちゃう……」
すると今度は、菜々香が明里と向き合うように、反対方向から陰茎に女陰を押しつ

けた。世にパイズリや尻ズリなるものがあるとしたら、これは二人の女性が協力してしかける、まさに女陰ズリとも呼ぶべき責めだ。

レズビアン同士が松葉崩しみたいな体勢で互いの恥肉を摩擦しあって快感を貪るプレイがある。明里と菜々香はそんな格好になり、蜜穴と蜜穴の間に硬く勃起した男根を挟みつけて、互いの股間を擦りつけあうような動きをした。

「ぐあぁ……」

「やだ、これ感じちゃう……」

「ふはぁ、明里さん、あたしも……」

二人は卑猥に腰をくねらせ、ペニスの前後にぬめる膣肉を擦りつけてくる。

隆々と勃起した男根は、膣から溢れ出す下品な汁であっという間にヌルヌルになり、ところどころに白濁した筋さえ付着させ始めた。

あまりの気持ちよさに、悪寒じみた戦慄が背筋を駆け抜ける。

息苦しさにかられて息を吸うと、鼻からは明里の小便の残り香が、口からは菜々香のワレメの匂いが勢いよく飛びこみ、媚薬のように脳髄を痺れさせた。

「ンフ、亀頭、気持ちよさそうにピクピクしてる。ほら、ここには眞知子さん♪」

菜々香は小悪魔めいた声で言い、赤銅色の亀頭に眞知子のショーツを巻きつけた。

ふわりと柔らかな下着の布に敏感な鈴口を包まれ、修平の悩乱はさらに高まる。
（ほんとかよ。あぁ、眞知子さんのパンツが、亀頭に……）
「嬉しいでしょ。眞知子さんのオマ〇コがくっつく部分を亀頭に擦ってあげてるよ」
幼なじみは興奮した声で言い、亀頭に巻きつけた下着ごと勃起をしごいた。
しかもサオの部分には温められた貝肉にも似た肉ビラが二つも張りつき、ナメクジが這った痕のような粘液をいっぱいに塗りたくりながら上下動を続けている。
「あん、感じちゃう。あかん……いっぱい感じちゃう……」
聞いたこともない艶めかしい声で明里が言った。
首筋と背中一面に、汗が噴き出している。汗は互いにくっつきあい、大粒の滴になって背中を垂れ流れ、尻の谷間に飛びこんだ。
「あぁ、明里さん、自分の手でクリトリスモミモミしてる……いやらしすぎる……」
修平からは見えなかったが、目の前の美少女の下品なふるまいを見て、菜々香がうわずった声を震わせた。
「だって、我慢できないの。気持ちいい……お願い、見ないでぇ、いやや……」
「そ、そんなことされたら菜々香も……ふはあぁ……」
当てられたように恥悦を高めた幼なじみは、ぬめるワレメだけでなく淫核までをも

猛る陰茎に擦りつけ、さらに激しく眞知子のショーツで亀頭を嬲った。
「むあっ。むあぁ……」
もう限界だった。修平にしてみれば、この世で最高に大好きな三人の美女の局部を、同時にペニスに擦りつけられているのも同然のいやらしすぎる苛烈な責め。
一気に射精衝動が高まった。陰嚢のなかで精液が沸騰し、輸精管が真っ赤に焼けるのを感じる。全身に鳥肌が立ち、耳の奥がキーンと鳴った。
「んあぁ、らめらよ。そんなころされら射精ひひゃう」
思わず叫んだ。呼応するように、ちょっとした変態痴女と化した女の子たちからも可愛い恥悦の叫びが漏れる。
「き、気持ちいい。私もイッちゃう、修平くん……」
「あたしも……修平ちゃん、一緒にイこっ……」
少女たちの腰の動きが激しさを増した。性器と性器が擦れあって立てる粘着音が凄(すさ)まじい音で鳴り響く。亀頭と摩擦する眞知子のパンツの刺激も最高に気持ちいい。
「んあぁ、気持ちいい！　イグよッ……射精ひゅる！　あぁ、出ひゃうぅ！」
「あぁ、イッちゃう。気持ちいいンン！　アハァァ！」
尿道が焼け焦げるかと思うほどの激感だった。

絶頂に達した修平は、亀頭の先から熱い白濁を怒濤の勢いで噴出した。精液が飛び出した先は、眞知子のショーツのなかだった。

電流でも浴びたように身体を痙攣させながら、バランスを崩した明里の背中が覆い被さってくる。もしかしたら軽い失神状態に陥ったのかも知れない。

慌てて腕を回し、ベッドから転げ落ちないように抱きとめた。

菜々香は菜々香で布団の上に倒れ込み、仰向けになって喘ぐ。豊満な乳房が重力に負けて左右に垂れ、柔らかそうなお腹がせわしなく膨らんだりへっこんだりした。

「な、何をしているの……」

そのとき、明里のものでも菜々香のものでもない声が、部屋の大気を震わせた。

ハッと我に返ったのは、自分だけではなかったようだ。

明里が、菜々香が、慌てて身を起こし、声のした方を見た。菜々香はすかさず、手にしたショーツを隠していた。修平も、顔面をすっぽりと覆っていた明里のショーツと、口のなかに突っこまれていた菜々香のショーツを取り、急いで隠す。

「こんなところで何をしてるんですか！」

今度は悲痛な叫び声だった。眞知子である。今にも泣きそうな顔つきになり、なじるような瞳で明里を、菜々香を、そして——修平を見た。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

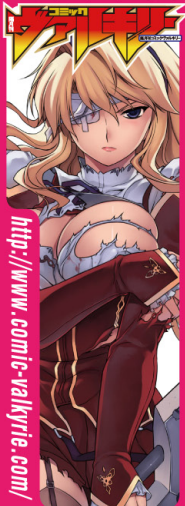
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！